

かまくら 女性史の会 Newsletter

第 124 号

2025 年 2 月 25 日 発行

〒248-0012 鎌倉市御成町 18-10

NPOセンター鎌倉 気付

メールボックス 26

E-mail: syokmat@yahoo.co.jp

《「峯山富美」と小樽運河》

戦前のニシン漁と石炭積出で栄えた小樽港は、戦後“斜陽の町”と呼ばれた。道庁と市当局の考えた地元経済の回復策は、大正期の運河を埋立て、周辺の石造倉庫を壊し、新しい道路建設（6車線）であった。それを市民が知ったのは、市議会決定から7年後、目前の倉庫群（30棟）の取り壊しが始まったときである。小樽で生れた峯山富美は、伊達市で教員をしていたが、40歳（昭30）のとき再び故郷へ戻ってきた。運河周辺の重厚な倉庫群の佇まい、住民の穏やかな人柄は、街全体に漂う歴史感とともに大好きであった。住民手作りの団体「小樽運河を守る会」（昭50発足）に参加して3年、彼女は63歳にして会長に推挙された。それを支えたのは、北大工学部の教員や運河を愛する道内の文化人たちであった。陳情請願の日々は、東京で国会議員へ、また鎌倉を本拠とする「全国歴史的風土保存連盟」で報告（昭54）の場が得られた。全歴風連には、前年「町並みゼミナール」（現NPO「全国町並み保存連盟」）も結成され、全国各地の住民団体から参加がみられた。特別に20分の場を与えられた彼女の話に参加者は感銘、北の地の運河問題は全国区の問題となり、その後はマスコミの連載や特集記事が急増した。そして第3回目（昭55）の「全国町並み保存連盟」の大会開催を引き受け、その後も24回（平13）と46回（令5）大会を住民の総力で成功させた（筆者はそのすべてに参加した）。

他地域と同様に、小樽でも行政側から計画の「折衷案」が呈示された。しかし、道路のルート変更が盛り込まれない同案は、市民の賛成を得られないまま、市議会で強硬採決（昭54）された。その後、地道な保存運動に協賛者も増え続け、昭57年の堤清二（西武）の発言「運河を埋立ようでは小樽再開発に協力できない」は、運動の大きな“転換点”となった。地元商工会の埋立支持は180度変更され、小樽を長崎や神戸とともに、日本の“三大港湾町並み”とする気運が高まった。その勢いは18万市民の過半数にあたる「10万人署名」を成し遂げたが、行政側はそれを認めず、58年から杭打工事に突入した。関係トップによる「五者会議」も開かれたが、市民の思惑どおりに進まず、いずれの方策も不発に終わった。

その頃から運動体の内部には、欲求不満とばかりに峯山体制への批判が湧き、組織への攻撃も増えた。同年に峯山は会長を辞し、残っていた幹事たちも除名処分を受けた。最後まで全面保存を訴えてきたことが叶わず、長い間、ともに運動してきた仲間だからこそ、生じた亀裂は修復できなかった。昭61年に道路は完成した。かつての40m幅の運河には、半分の水面と散策路が残された。その水辺空間は、富美たちの主張と異なる景色である。会長を辞めた彼女は、執筆活動や講演で全国を駆けまわった。平20年、「日本建築学会」は彼女に学会賞を授与し、その記念碑は運河公園の桜の下にある。受賞から2年後、富美は96歳で生涯を閉じたが、「全国町並み保存連盟」はその功績をたたえ、全国の女性運動家を対象に「峯山富美賞」を設けた。二月の小樽では、運河一帯に幻想的な明かりの揺れる「小樽雪あかり路」が市民の手で創られ、“小樽っ子”の心の原風景をいつまでも醸し続けている。